

鈴木有郷牧師説教

2/6/2010 あなた達は地の塩、世の光 マタイ5:13-16

イエスは丘のふもとに座って群衆に語りかけました。「あなたがたは地の塩、世の光である。」この、ひとつまみの塩と燭台に置かれたランプのイメージは、日米合同教会の存在意義とそれに連なる私たちの人生の目的を明らかにしてくれます。

ダビデ王国が崩壊した後、イスラエルは約500年に渡り、アッシリア、バビロニア、ペルシャ、ギリシャ、そしてローマによって征服され続けました。

当然のことながら、そのような国家崩壊が続く中で、人々は生きる目的を失い、深い失望に落ち込んでいました。

主イエスの回りに集まった群衆は、そのようなイスラエルの精神的状況に飽き足らず、人生の意味や、国家の存在意義を模索していた良心派、真面目な人々だったのです。彼らは主イエスに、人生の意味は何か、何のために人間は生きているのかを問うために集まっていたのです。

主イエスの答えははっきりしたものでした。あなたがたの生きる目的、それは地の塩となることだ。

塩は食べ物の味付けになくはならぬものでした。ひとつまみの塩が食べ物をどんなにおいしくするかを良く知っていた人々にとって、主イエスの言葉の意味は明快でした。「あなたがたの人生の目的、それは、この世界を神の慈しみに味付けすること、これだ。」

主イエスは語り続けます。「人生の目的、それはこの世の光となることだ。」人々は、夜の帳が下りた後の暗闇の中で、一条のランプの光がいかに彼らの生活を和ませるかを知っていました。その彼らにとって、主イエスの意味は明らかでした。「あなたがたの人生の目的、それは神の働きを人々に見えるようにすること、これだ。」

疲れきった旅人を元気づける、丘の上に輝く灯火のように、あなたがたは神の愛と慈しみをこの暗闇に満ちた世界に輝かすことだ、と言うのです。

そして主イエスは結論されます。「私はあなたがたを燭台の上に置く。そこで神の光を照り返しなさい。この疎外とエゴイズムが渦巻く中で、神の下における一致と和解の器となりなさい。」

2000年後の私たちの世界は、当時と同じように、無意味さと虚無感に覆われています。その世界を中原中也という詩人は次のような言葉で表現しました。

「時に自分をからかうように、僕は自分に訊いてみるのだ。それは女か？うまいものか？それは栄誉か？すると心は叫ぶのだ。あれでもない、これでもない。あれでもない、これでもない。」

日米合同教会の存在意義、そのメンバーである私たちの生きる目的、それは中原中也が唄ったような世界を、神の愛で味付けすることです。神の働きを見えるようにすることです。

人生の目的は情欲の追求にあるのではなく、食欲の充足でもなく、この世の栄華、栄光でもないことはおぼろげながら分かる。しかしそれが何かは分からないという人々に、主イエスを指し示すことです。

つまり、この教会を相互補助の精神と慈しみに満ちた信仰共同体、他者の善を願い、そのために努力する人々の祈りと証の共同体とすること、これであるに違いありません。

これは紙にかいた餅でしょうか。荒唐無稽な理想でしょうか。主イエスはそう考えてはおられません。2000年前と同じように、主イエスは今この礼拝堂に集っている私たちに語りかけておられます。「あなたがたは地の塩、世の光。だから輝け！燭台の上で輝け！」

この人生の目的を実践しようと努める私たちを、主イエスは結果が十分でないという理由で見捨てられることはありません。「味付けせよ。輝け。輝け。燭台の上で輝け。」主イエスの言葉が私たちを離れることはありません。この確信こそ私たちの生き甲斐の基盤です。勇気と喜びの源です。